

博物館からまちをめぐり、歴史をたどる 「しづれきガイドツアー」

歴史博物館を起点に、静岡市街の歴史スポットをめぐるオリジナルツアーを開催しています。ガイドスタッフの解説で、意外な歴史エピソードや、歴史上の人物と土地のゆかりを発見してみませんか？今年度は全部で5コース！それぞれ2キロ程度、約90分の行程です。ぜひお散歩気分でご参加ください。

日時 各土曜、日曜、祝日 10:00/13:30に出発
参加費 無料 **定員** 各回10人
申込方法 お電話で静岡市歴史博物館へ申込
TEL:054-204-1005
各回とも前月最初の開館日に受付開始(申込順)

※各回の実施コースは月ごと変わります。詳しくは、ホームページをご覧ください。

●家康の城「駿府城」コース

大御所 徳川家康の拠点として天下普請で築かれた駿府城をじっくりと探訪します。
【おもな立ち寄りスポット】 駿府城公園 異櫓・東御門、天守台跡、徳川家康像 ほか

●家康と駿府コース

駿府城の西側、かつての武家地一帯を辿り、徳川家ゆかりの人物などを紹介していくコースです。
【おもな立ち寄りスポット】 浅間通り、山田長政像、静岡浅間神社 ほか

●山科言継が見た！今川氏と駿府コース

今川義元の縁戚にあたる公家、山科言継が記した『言継卿記』の記述をひも解きながら、徳川家康を育んだ今川氏と、戦国時代の駿府の繁栄ぶりに想像を広げるコースです。
【おもな立ち寄りスポット】 四足御門跡、浅間通り、静岡浅間神社 ほか

●町人のまち、駿府九十六ヶ町コース

大御所 徳川家康が整備した町割り「駿府九十六ヶ町」をイメージしながら、かつての城下町の中心エリアを巡ります。城下の町人たちの暮らしに思いをはせるコースです。
【おもな立ち寄りスポット】 駿府町奉行所跡、呉服町、別雷神社 ほか

●大政奉還、徳川と静岡の絆コース

幕末から明治にかけて活躍した人物たちの足跡を辿りながら、徳川家と駿府の深い絆を感じていただくコースです。
【おもな立ち寄りスポット】 西郷隆盛・山岡鉄舟会見記念碑、宝台院、教覚寺 ほか

1月							2月							3月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7		1	2	3	4			1	2	3	4			
8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11
15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18
22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	19	20	21	22	23	24	25
29	30	31					26	27	28					26	27	28	29	30	31	
※1/8日は13:00開館							※1/11水、12木は臨時休館							※1/13金は14:00開館						

● 休館日

開館時間 9:00～18:00(※展示室への入場は閉館30分前まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は開館、翌平日休館)、
年末年始(12/29～1/3)

基本展示観覧料 一般 600円(480円)
高校生・大学生・市内70歳以上 420円(330円)
市外小中学生 150円(120円)

※()内は団体20名以上の料金 ※企画展示は別途料金設定有
※一般の方以外は、学生証等確認できるものをお持ちください
※身体障害者手帳等をお持ちの方とその付添者1人は無料
※混雑緩和のため展示室の観覧について日時予約制(WEB予約)を導入しています。詳しくはホームページをご覧ください。

交通アクセス

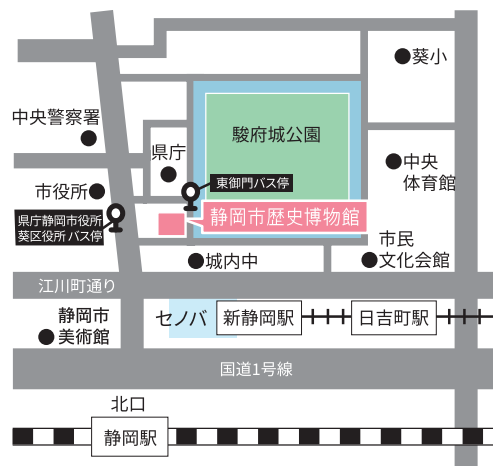
【JRをご利用の場合】
○「静岡駅」北口から徒歩15分
タクシーで約10分
駿府浪漫バス(10番乗り場)で「東御門」下車すぐ
しずてつジャストラインバス
「県庁・静岡市役所葵区役所」下車 徒歩6分

【静岡鉄道をご利用の場合】

○「新静岡駅」から 徒歩8分

【富士山静岡空港ご利用の場合】

○富士山静岡空港から
しずてつジャストラインバス 富士山静岡空港静岡線
「新静岡」下車 徒歩8分



静岡市歴史博物館
Shizuoka City Museum of History

静岡市葵区追手町4番16号 TEL:054-204-1005
ホームページ: <https://scmh.jp> FAX:054-204-7373
指定管理者 公益財団法人静岡市文化振興財団



発行: 令和5年1月

彰往考来とは…「過去の歴史を探究して、よりよい未来をつくるヒントを得る」という意味が込められ、博物館のシンボルとして徳川家達の書が展示室に掲げられています。

静岡の過去を学び、今を知る。そして、未来を考える。

彰往考来

しょうおうこうらい

創刊号

巻頭 訪ねてみよう 歴史スポット

戦国時代末期の道と石垣の遺構 (静岡市葵区追手町 静岡市歴史博物館内)



開館記念企画展

「徳川家康と駿府」

関連記事 3ページ

令和5年 1月13日(金)～2月26日(日)



徳川家康像(宝台院所蔵)



訪ねてみよう！
歴史スポット

発見！ 天正時代の道と石垣

静岡市歴史博物館の建設前の調査で発見され、そのままの姿で施設内に保存・公開されることになった「戦国時代末期の道と石垣の遺構」は、博物館の中でひととき存在感を放つ展示物です。

静岡市埋蔵文化財センターで行われている剥ぎ取り展示など「遺構」の展示はいろいろなところで行われていますが、建物の中に「遺構」を、発掘された状態のまま取り込み露出展示するという試みは全国的にも大変珍しいケースです。

道が作られ、使われなくなり、博物館ができるまでにおよそ440年。その間にこの場所は何度も姿を変え、昭和29（1954）年には、青葉小学校ができました。その際遺構は、校舎が建っていたエリアから少し南にずれた位置にあったため、壊されずに残り、博物館の建設前の調査で日の目を見ることとなったのです。この「道」は、博物館の敷地を越えて東西両方向に伸びていることは分かっていますが、その先がどこへ続いているかまでは調査が及んでいません。駿府城へと伸びる南北の大手道にもしかしたら続いていたのかもしれませんが、記録が残っていないので、確かなことはまだ分かっていません。



上段左：遺構の野面積みの様子



上段右：遺構の裏込めの様子

下段右：駿府城公園
天守台発掘調査現場の石垣



記録がないのに、どうして「戦国時代末期」の道と推定されたのか。それは、もう一つの要素である「石垣」のおかげでした。駿府城公園で行われている駿府城天守台の発掘調査で発掘された、「天正時代の天守台」（写真：下段右）の石垣で用いられている「野面積み」。その石の積み方や使っている石材が似ていることから、同じ頃に作られたと考えられたのです。野面積みは、自然石をほとんど加工せずに積み上げた石垣で、自然のままの石を使うため、不揃いな大きな石を積んで隙間に小さな石をつめていきます。遺構に、「野面積み」（写真：上段左）の様子がよく分かる部分が残っています。また、石垣の裏側はなかなか見る機会がありませんが、野面積みを安定させるための「裏込め」（写真：上段右）と呼ばれる詰め合わせた小石の様子もみることができます。

この「道」が使われていた頃とされる天正期には、駿府城は二ノ丸堀までしかなく、この場所は城の外であり、また駿府城大手の近くであったことから、両側に重臣クラスの武家屋敷が建っていたのではないかと推測されています。発掘された33mにわたって、石垣が途切れることなく続き、出入口などがないことから、随分と大きな武家屋敷が建っていたようです。この1間半（2.7m）ほどの幅の道を、どんな人がどんな風に往来していたのか、もしかすると徳川家康も歩いたのかもしれない。

戦国時代末期の道と石垣の遺構

- ところ** 静岡市歴史博物館（静岡市葵区追手町4番16号）
1階無料エリア内
- 特別** 学芸員による道と石垣の遺構ミニ解説を実施中！
時間については博物館ホームページをご確認ください。
- 周辺** 駿府城公園 天守台発掘調査現場
博物館より徒歩約5分



駿府の家康政権の 統治と文書

学芸課長 廣田 浩治



大御所家康の駿府政権の構造を、その国政文書から研究しています。家康の国政は「駿府年寄」「駿府奉行」の連署文書(連署状、連署奉書)により執行されました。「駿府年寄」「駿府奉行」とは主に本多正純・大久保長安・成瀬正成・安藤直次・村越直吉の5名のことで、本多は徳川譜代重臣の本多正信の子、大久保は金山など奉行を兼任、成瀬・安藤・村越は家康の側近で、成瀬は家康九男義直(尾張の大名)の付家老、安藤は家康十男頼宣(駿河・遠江の大名)の付家老です。このうち本多が筆頭年寄のような立場といえます。

また「駿府年寄」「駿府奉行」の連署文書には、他に永井直勝、井出正次(駿河代官・駿府町奉行)、彦坂光正(駿河代官・駿府町奉

行)、畔柳寿学(奉行)、後藤庄三郎(金座支配)が加わることもあります。このように大御所家康の政治は「徳川四天王」や三河譜代ではない側近・奉行によって担われていました。

さらに駿府にはいない板倉勝重(京都所司代)、米津親勝(畿内支配担当)、土井利勝(江戸の将軍秀忠年寄)も、連署に加わった事例があります。家康政権は江戸の将軍秀忠や京都・畿内の重臣もその傘下に置いていました。また本多正信・正純父子は、家康や秀忠の命令を補完する書状(添状)を出しています。父子でも地位の高い本多正信は江戸にいながらにして、家康の筆頭年寄であったかも知れません。こうした「駿府年寄」の連署文書は後の江戸幕府の老中の発給文書の原型になります。このように命令文書の連署、発給、機能から、家康政権の仕組みを探っています。

なお家康の側室たちも「折紙」という書状を大名たちに出し、家康の国政に大きな役割を果たしていました。こうした家康を支えた女性たちの手紙も家康政権を考える上で注目されます。

家康と将棋の関わりを 読み解く

学芸課 参事 森 昌俊



主に、古事記や日本書紀を基本史料として、古代史を勉強しています。しかし、博物館で古代の資料を取扱う機会は皆無と言って良く、私自身30年間にわたる学芸員生活のなかで、墨書土器と木簡を除くと古代の文字資料を取扱ったことがありません。いきおい、取り扱う機会が多い、江戸時代や明治時代以降の史料を対象にして研究を行うことが多くなります。

当館の基本展示の中心テーマになっている徳川家康は、権力を握っていく過程で、当時の将棋や囲碁の強豪との交流を深め、面前で対局させることにより、江戸幕府及び徳川將軍の権威を高めることに利用したと言われています。

最近、静岡県内の旧家に、将棋に関する超一級資料が伝来していることを知りました。将棋に関する歴史的な研究は限られていて、専門の研究者もほとんどいません。歴史学の世界では、遊びに関する問題関心が薄かったのが原因ですが、将棋の歴史を解明するための資料の存在があまり知られていなかったことも要因のひとつでした。この資料の研究をつうじて、戦国時代から江戸時代にかけて、家康が将棋とどのように関わろうとしたのか、考えていきたいと思っています。

駿府を治めた戦国大名

学芸課 主任 鈴木 将典



戦国時代に駿府を治めた今川氏・武田氏・徳川氏の領国支配や、その下にいた領主(国衆)に関する著書・論文が多くあります。今は徳川家康と今川氏の時代を中心に、静岡市内にある戦国時代の古文書を調査しています。

今川氏は駿府を約230年にわたって治め、最盛期には駿河・遠江・三河を領国としました。また、分国法の制定など領国支配の仕組

みを整え、他の戦国大名にも影響を与えました。今川氏が滅びた後に駿府を治めた武田氏・徳川氏も、今川氏の政策を引き継いで支配を行っています。

また、徳川家康は駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の五か国を治める大大名となった後、豊臣秀吉の下で領国の「改革」を行い、農村支配の仕組みを整えました。駿府城の天守台跡から発見された金箔瓦に象徴されるように、秀吉と家康の関係も再評価されています。

最近、家康や今川氏に関する研究は大きく進化しています。これらの成果を展示や講演などに反映させ、皆様にご紹介いただくことが私の重要な仕事です。

静岡の知の殿堂・葵文庫

学芸課 主査 青木 祐一



現在静岡市歴史博物館が建っているこの地に、かつて「葵文庫」と呼ばれた図書館があったことを記憶されている方も多いでしょう。その痕跡は、博物館前にある「葵文庫」の碑に記録されています。静岡における図書館の歴史は、明治時代にさかのぼります。初代県知事であった関口隆吉は「久能文庫」の設立を提唱しましたが、実現せずに終わりました。その後、大正時代に入ってから、「葵文庫」を設立することが決まります。その建設費集めに奔走したのが、渋沢栄一です。渋沢は自ら寄付をするとともに、旧静岡藩主であった徳川家達をはじめとする静岡ゆかりの人びとに寄付を呼びかけました。こうして、静岡県立葵文庫は大正14(1925)年に開館しました。初年度の大正14年度の利用者は約14万人にのぼりました。

葵文庫の特徴として2つが挙げられます。

ひとつは、蔵書の構成です。葵文庫の蔵書の基礎は、関口の「久能文庫」と、旧幕府の教育・研究機関から引き継いだものの一部からなっています。これは、徳川家が江戸から静岡へ移るにともなって、人とともに情報や知識も一緒にもたらされたことを意味します。

もうひとつは、「郷土資料展覧会」の開催です。葵文庫では郷土資料を一般に公開する展覧会が頻繁に開催されていました。この際には、葵文庫の所蔵資料だけでなく、県内から広く資料を集め、歴史資料の価値と、それを保存することの重要性を一般に訴えていました。葵文庫という名前の由来は、徳川家と静岡との深いつながりにあります。また、旧幕府の蔵書が当時の最先端の教育を支える知識となり、県内の貴重な歴史資料を保存・公開することが主張されていました。その意味で、葵文庫はまさに「静岡の知の殿堂」だったのです。

博物館ということかく「展示」が注目されがちですが、過去に葵文庫が果たしていた役割をこの地で引き継ぐことも静岡市歴史博物館の重要な使命と考えています。

評定所は見た！ 駿府のまちの人びと

学芸課 学芸員 太田 那優



江戸幕府の評定所に残った裁判記録をつかった研究をしています。江戸時代の静岡は幕府の直轄地だったため、駿府の記録が江戸(東京)の役所に残ることがありました。こうした記録から、江戸時代

の人々の暮らしを垣間見ることができます。裁判のときには、非常に細かく調書をつくります。そのため裁判記録からは、日記や手紙などの記録には出てこないような、生き生きとした人の動きをうかがうことができるのが魅力です。駿府のまちでは、幕府から派遣されてくる種々の役人、代々駿府のまちに暮らす町人、神事をつかさどる寺社の僧侶・社人など、さまざまな身分の人々が近接して暮らしています。裁判記録を追うことで、駿府のまちの特徴が浮かび上がってくるかもしれません。

駿府の建築工事探訪

学芸課 学芸員 増田 亜矢乃



江戸時代の駿府には、駿府城をはじめ久能山東照宮、宝台院など徳川將軍家とゆかりの深い建物が数多くありました。これらの建物は当時の江戸幕府に重要視され、江戸時代前期には建築や修繕を幕府の命令で派遣された大工や大名家が行うことがありました。江戸時代後期になると、駿府の役人組織の中でも建築を所管する部署が置かれ、また在地の大工等の職人の技術も向上することで、建築物の工事の計画・設計・施工までが、駿府に暮らす人びとの中で完結するようになります。

駿府の主要な建築物のひとつでもある静岡浅間神社は、安永2(1773)年と明暦8(1788)年の二回の火事で境内の建造物が全焼し、文化元(1804)年からおよそ60年にわたり造営工事が行われま

した。当時建てられた建物は、現在国の重要文化財となっています。江戸時代に行われた静岡浅間神社の造営は、予算の確保から施工まで在地の役人や職人たちが中心となって行われました。

静岡浅間神社では現在、県内の日本史・建築・民俗等の研究者で組織した静岡浅間神社総合研究会が静岡浅間神社が所蔵する資料の調査・整理、研究に力を注いでいます。所蔵資料の中に駿府町奉行の組織の中にある「破損方」とよばれる建築工事を所管する専門部署の文書が残されていることがわかり、静岡浅間神社の造営の経過を克明に伝えてくれます。また、この「破損方」は静岡浅間神社だけでなく、駿府城や宝台院などの主要建築物の普請・作事も担当しており、駿府と周辺部の建築物の補修経過を知ることができる貴重な資料群です。

建物の工事記録を見ると、それぞれの建築物が当時どのように扱われていたのか、その位置づけを知ることができます。事例を蓄積することで、駿府という地域の位置づけを考える手立てにもなるのではないかと考えています。